

研

究

R E S E A R C H

幼児の音感受

ノートルダム清心女子大学教授

吉永 早苗

一 素朴な音を感受する幼児

武満は「私たち（人間）の耳の感受性は衰え、また、怠惰になってしまった」と断言している。保育界においても、「幼児は多くの音を聞いてはいても耳を澄ませずして聴いてはならず」^①、「聴くことに向かおうとする姿勢が失われ、身のまわりの音への気づきも少なくなってきた」^②など、近年、幼児の音に対する感受力の低下が問題視されるようになってきた。

しかし幼児の遊びを見ていると、大人が聴き逃してしまいうような音に対する微細な気づきに、ハ

ツとさせられることは少なくない。たとえば、カーブした小川の畔を行ったり来たりしている3歳児に理由を尋ねると、「あつちとこつちと、音が違う」と教えてくれた。同じように歩いていても、聴こうとしなければ聴こえない音の変化である。また、「ドイージヤー」と言いながらおもちゃのシヨベルカーで遊ぶ2歳児の擬音は、実音に忠実である。音を聴くことに集中していたからこそ生まれた表現である。また輪になってトーンチャイムを交互に鳴らして遊んでいたとき、5歳児から「ポーン」と音を投げかけられた3歳

児は空中を仰ぎ、その音を見送るように後ろを向いた。その仕草はまるで音の軌跡を追っているように見えた。また、細い木の枝を横笛のように口元に当てて優雅に舞う3歳児の姿には、彼女が数日前に聴いた篠笛の音が聴こえてくるようであった。このように、幼児の音の感受はさまざまである。身のまわりの音に対する聴き方の鈍磨の指摘がある一方で、幼児が、音を繊細に感受していることも事実である。

こうした幼児の音の感受の状況を明らかにすること、そしてまた、幼児の音の感受力を高めるための指導内容や方法の検討と開発が筆者の研究である。研究では、音（おと）感受を、「身のまわりのモノの音や人の声を聴いてその印象を感じたり、それに共鳴したりして、感情が起り、さまざまの連想を引き起こすこと」と定義している。

研究方法としては、自由な遊びのなかでの行動や表現の観察、物

理的な音響測定、音声に対する感情評価調査などを行ってきた。本稿ではそのデータの中から、場の響きをとらえた幼児の遊びと、多様な「ハイ」の表現に対する幼児の音声評価の調査の一部を紹介する。

二 モノの音の感受

人はなぜ、お風呂で歌ったり、トンネルの中で人はなぜ思わず声を挙げたりするのだろうか。それは声がよく響くからである。廊下を抜けて開放的なホールに入ってくる幼児の多くが、「わあーっ」と声を上げるのも同様であるだろう。この行為には開放的な視覚空間というアフォードとともに、その場の響きといった聴覚的なアフォードも関係していると考えられる。

そこで、東京都内のある幼稚園において、音響特性の異なる場所での幼児（3歳〜6歳児）の遊びの観察を行ったところ、次のようなことがわかった。

観察場所は、耳で聴いた印象の

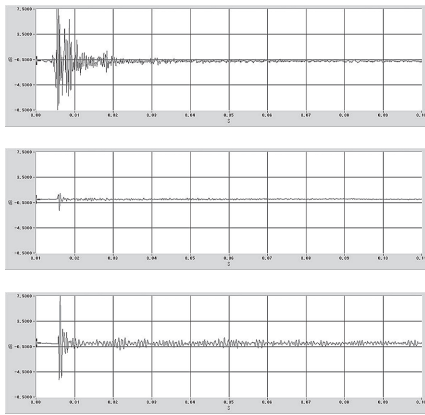


図1 音の減衰

子となる3カ所を選んだ。それは、音がよく響くホール、音が吸収されて静かな空間が確保されるカーペットの敷かれた階段下のスペース、自分の足音がはね返って聴こえてくるテラスである。次に、各場所の物理的な音響特性について、幼児の遊具である積み木でそれぞれの床面を叩いてデータレコーダ（リオン社 DA-30）に記録し、波形分析ソフト（CAPT-WAVE）によって音のエネルギーの減衰を求めたところ、図1のような結果が得られた（上から順に、ホール・カーペット・テラス

での音の減衰。約40dB）。

グラフから、三地点の響きに明確な違いのあることがわかる。ホールでは音が最も大きく響き、拡がっている。カーペットの敷かれたスペースでは音がほとんど響いていない。テラスではホールほどの音の響きは得られないが、減衰の仕方が最も緩やかで、一旦取まった響きが、その後も小さく反復されていることが見て取れる。すなわち、ホールは残響が大きくて響きに包まれる性質（包む音の空間）、カーペット部分は音がストリートに伝わる性質（届く音の空間）、テラスは音がはね返ってくる（返る音の空間）響きの特徴があるといえよう。観察は秋と冬（2011年度の2回、登園後の90分間の自由な遊びの様子を記録した。また、それぞれの場にビデオカメラを設置して、音を伴う幼児の行為の種類を抽出した。それらは、「足元の動き」、「声」、「モノを使っ

た行為」の三種類に分けられた。

分類の結果、足元の動きが多様に観察されたのはテラスであった。声はホール、モノを使った行為は階段下において、最も多様な種類の表現が観察された。これらの行為には、音が楽器を鳴らしたように響く（テラス）、響きが拡がる（ホール）、微細な音の変化が聴き取れる（階段下）といった、それぞれの場の音響特性が関係していると考えられる。

音を伴う行為の特徴としては、ホールでは積み木を倒したり、ビーズをばら撒くなどしてわざと大きな音を出すこと、声に関しては、大きな声を出すだけではなく、長く伸ばしたりはつきりと発音したりするなど、音を響かせる表現が多く観察された。階段下では大きな音を立てる行為は観察されず、音声やモノが作り出す微細な音の違いを聴くことを取り入れた遊びが観察された。テラスでは、リズムミカルな動きや声・音の出し方が特徴的であり、移動しながらステ

ップが変化したり、会話がリズムカルになったり歌うようになったりするような表現が多く見られた。

このように、幼児が遊びのなかで、モノの音を出したり聴いたりして楽しんでいることに加えて、場の音の響きが幼児の遊びをアフォードすることが確認された。場の響きの特徴と幼児の行動には、次のような関連があるといえよう。

- ① 「包む音」の空間は、音や声を大きく響かせようとすると動作を誘発する。
- ② 「届く音」の空間は、音や声に耳を澄ませることを促す。幼児にとっては、「聴く」行為がそれ自体が遊びとなっている。
- ③ 「返る音」の空間は、多様な音をつくり出す動作を生み出し、幼児が音と戯れることを促進する。

三 人の声の感受

幼児は、音声に込められた感情や意図をどのように感受しているのだろうか。筆者は、10種類の感情や意図を込めた問投詞的応答表現「ハイ」の音声を作成し、その印象評価を調査した。

それぞれの音声は、幼稚園教諭（保育経験1年の女性）に、次の10種類の意図・感情を込めて発声するように依頼し、筆者監修のもとで録音した。

音声の印象評価は、保育者・小

- ① 明るい返事
- ② 聞き返す感じ
- ③ 「わかったわかった」という感じ
- ④ どうでもいい感じ
- ⑤ 注意を喚起させるように
- ⑥ いやいやながらという感じ
- ⑦ 話題に転換として
- ⑧ 命令、急がせる感じ
- ⑨ 緊張した感じ
- ⑩ 「やれやれどうしたの？」という感じ

学校教諭による質問紙調査と幼児を対象としたインタビュー調査を行った。前者による評価結果から、「ハイ」のそれぞれに込めた感情や意図が、ほぼ正確に聴き手に伝わっていることが確認された。そして幼児も、大人と同様に声のニュアンスを感受し、その機能の差異をしっかりと読み取っていた。

たとえば、音声①は「よい返事」、音声②は「わかんない感じ」、「なに？って感じ」、あるいは「お父さんが面倒な時に言う」、音声④に「機嫌が悪い」、音声⑦は

「わかった時」、「集まっついて先生が外に出るよって言う時」、音声⑧は「びっくり」、「急ぎなさい」、音声⑨は「緊張していた」など、その音声機能の特徴を正確にとらえた回答がほとんどであった。さらに機能や印象だけではなく、そのときの状況を想像して詳しく説明することのできる幼児も多量いた。たとえば、音声①では、よい返事の

中身が、「先生に呼ばれて手を挙げる感じ」、「小学生が手を挙げた感じ」と具体的である。音声④は「お兄ちゃんが勉強してって言われて」、まじめな音声⑨は「部屋で検診をしている時」、音声⑩は、「お腹が空いてお母さんにパンを作ってくれるように頼んだときに、面倒そうに言われた」など、

音声状況を関連させながら回答している。このことから、幼児が日常生活のなかで、話者の言葉の内容だけでなく、音声に込められた感情をしっかりと感受していることがわかる。なお、音声④に対する「聞いてなくて睨んでいる感じ」という回答のように、音声から、話者の目つきまで想像するほど鋭い感受もあった。

また、意図された内容とは異なるけれども、納得させられる回答も見られた。たとえば音声⑤は呼びかけを意図して発声した音声であるが、「みんなが楽しい気持ちになって元気が湧いてくる」、「やりたいことをお母さんがやらせて

くれてうれい」など、自分自身の喜びの表現としての返事として受け止められている。音声⑨は、命令・急かすイメージで発声した音声であったが、「好きな人に呼ばれてドキドキ」との回答は、筆者の想像も及ばないものであった。改めてその音声を聴き直してみると、たしかにそのようにも聴こえる。幼児は、音声から感情の微細なニュアンスを感受して、話者の感情を想像したり、その場の状況を連想したりするなど、人の声を聴いて複雑な思考を行っているのである。

四 感じる・考える・表現する

これまで述べてきたように、幼児は、モノの音・人の声を聴いて、単に音に興味を持つだけでなく、響きの複雑さを感じ取り、音や声を介してさまざまに考えをめぐらせていることがわかった。それは音楽に対しても同様であるはずだが、現状はどうであろうか。

友だちと一緒に歌うこと、楽器

を鳴らすこと、音楽に合わせて身体を動かすことは、それ自体楽しい活動である。しかしこのとき幼児は、音や音楽に印象を感じたり、何かを連想して音や声を出したりしているだろうか。また、音楽表現は発表という形態によってその成果が伝えられるため、アウトプットのための方法論に意識が向けられがちである。保育者の指示や号令で仕上げられていく音楽表現活動のなかに、幼児の「音感受」は存在しているだろうか。

幼稚園教育要領・保育所保育指針には、表現のねらいとして「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と明記されている。音楽表現においても、音や音楽を聴いて「感じる・考える」といった心的なプロセスの豊かさが、幼児の感性と表現を育むのである。

五 音感受教育

「音感受教育」とは、幼児の「音

感受」の質を上げていくことを指す。質を上げるとは、素朴な音感受が、それを繰り返すなかで、豊かで深い音感受に変容していくことである。音感受教育では、保育者の感性と豊かな音環境が重要な役割を担う。

保育者の感性とは、幼児の素朴な音への気づきや、音の表出行為に注意を向けることのできるセンスであり、それは幼児理解とも深くかかわっている。一方、豊かな音環境とは、「聴覚的なできごと」を豊かに実感できる音環境であり、具体的には、日常生活の中で様々な音に気づいたり、それらに心を動かされ楽しんだりできるような、音による気づきの豊かな環境である。

音感受教育においては、音環境と幼児、および保育者の三者間には、図2に示すようなサイクルが構成され、その循環には、それぞれの質を向上させる相互作用が働くと考えられる。

すなわち、幼児の「音感受」に

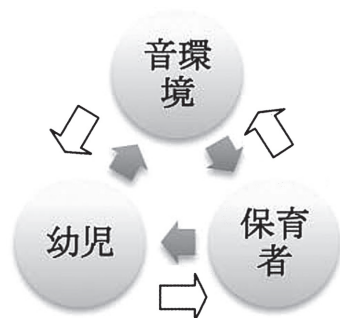


図2 音感受教育における相互作用

気づくことで、保育者は、幼児がそこで「何を」感じているのかを考えるようになる。それは、幼児の素朴な音の感受への共感となるとともに、保育者自身の「音感受」の拡がりにつながる。保育者の「音感受」力が高まれば、幼児をとりまく音の環境に、配慮や工夫ができるようになる。こうして多様な音感受が生まれるような環境が構成されると、幼児の音感受はさらに質を高めることになる。

〔注〕

(1) 武満徹『武満徹著作集3』新潮社 2000 p. 39; 武満は、「今の私たちの生活環境は、

音というもののその大事な本質を見失わせるような方向に、極端に進んできてしまっている。音は消えるという、最も単純な事実認識にたちもどって、もう一度、虚心に(音を)聴くことからはじめよう」(pp. 38-39)と提言している。

(2) 立本千寿子『幼児の音の聴取・表現力と行動特性―「聴く・つくる」活動を通してみる幼児像―教育実践学論集』(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科) 第12号 2010 pp. 113-125.

(3) 金子弥生『思考する人を育てる音環境 音楽教育実践ジャーナル』第4巻第2号 2007 pp. 18-21.

本稿の詳細は、2012年度白梅大学大学院子ども学研究科博士論文『幼児期における音感受教育―モノの音・人の声に対する感受の状況と指導法の検討』をご参照ください。